The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮沢賢治『なめとこ山の熊』論 : 小十郎の持つ二面性
Author(s)	西村, 真由美
Citation	語文. 2004, 83, p. 12-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宮沢賢治『なめとこ山の熊』論

――小十郎の持つ二面性――

西村真由美

一、語り手の語る物語――一方向へと導く語り手――

『なめとこ山の熊』の物語は「私」という語り手によって語られるが、[1]この語りについては先行研究でも早くから言及されてきた。原子朗氏[2]、続橋達雄氏[3]は、この語りの面白さ、物語を生き生きさせる効果をそれぞれ評価している。また、田近洵一氏は「現実の語り手賢治と虚構の語り手との分裂」を読み取り、それを「賢治の孤独」と重ね合わせている。[4]この他の論でも、語り単独での考察や、作者との関わりへの言及が目立ち、この作品の本文自体を読解する上では、特に重点を置かれないことが多かったように思われる。その中で木村功氏は、熊と小十郎の関係を考える上で、「従来の研究では語り手の姿勢に疑念を抱くことがない」として従来論への疑問を呈した。[5]本稿も、語り手の存在を考慮しながら本文読解をすすめるべきだという点で、この木村氏の論と同じ方向性を持つものである。しかし、木村氏は熊と小十郎との関係においてのみ、語り手の姿勢を問題視しているが、〈語り手の姿勢〉はその一点に限って関係するものではなく、さらなる考察が必要であると思われる。本稿を進めるにあたり、まずは語りの特徴を改めて捉えていくことからはじめたい。

まず、この作品の語りの特徴としてあげられるのは、「とにかく」という語の多用である。

・「間ちがってゐるかも知れないけれども私はさう思ふのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆は名高いものになってゐる。」

・「それからあとの景色は僕は大きらいだ。けれどもとにかくおしまひ小十郎がまっ赤な熊の胆をせなかの木のひつに入れて」

・「それからあとの小十郎の心持はもう私にはわからない。とにかくそれから三日目の晩だった。」

語り手は、この語を多用して、わからないことや語りたくないことは省略しながら、自分の語りたい事を無理やりにでも語り続け

ていくのである。このことからはこの語りの強引さを見出すことができる。「とにかく」を用いる語りはこの作品に限ったことではなく、童話『フランドン農学校の豚』や初期短編の『秋田街道』にも同様の例はみられるものの、それらにおいては作品中一回のみ「とにかく」が用いられるのに対し、『なめとこ山の熊』では作品冒頭部から最終場面まで、何度も繰り返されることが注目される。それだけこの作品の語りはより強引になっているのである。また、なめとこ山の雄大な自然を語った後で、「ほんたうはなめとこ山も熊の胆も私は自分で見たのではない。」と、突如「熊の胆」という商品を提示してくるという唐突性も特徴的である。さらに、「熊捕りの名人」と小十郎を紹介した後、「そこであんまり一ぺんに云ってしまって悪いけれども」といいながらも、何の説明もなしに「なめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ。」という信じ難い事象を突然語ることからも、語りの強引さが非常に特徴的なことが伺える。

このような語り手である限り、その役割は、ただ物語を進行させるということのみでは終りえない。

・「それからあとの景色は僕は大きらいだ。」、

・「ところがこの豪儀な小十郎がまちへ熊の皮と胆を売りに行くときのみぢめさと云ったら全く気の毒だった。」

・「旦那は町のみんなの中にゐるからなかなか熊に食はれない。けれどもこんないやなづるいやつらは世界がだんだん進化するとひとりで消えてなくなって行く。僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないやうないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしゃくにさわってたまらない。」

この語り手は、時折一人称を「私」から「僕」に変えて、「大きらい」等の自らの意思を表出してくる存在でもある。さらに、小十郎を「豪儀」で「みぢめ」で「気の毒」な存在として捉え、そんな彼を「立派」とし、「いやなやつ」である荒物屋の主人と対比的に評するという主観性をも露にする。

このように、主観を持ち、「とにかく」と繰り返しながら強引に物語をすすめるこの語り手は、明らかにこの物語を自分の伝えたい一方向へと押し進めようとする姿勢を持っている。そのため、語り手が伝えたい小十郎像は、読み手に強く印象付けられることになる。そして、その「立派」な小十郎が熊に殺されながら「熊どもゆるせよ」と思いつつ死んでいき、熊たちが小十郎の遺体を弔うように囲む展開となる時、読者の感動を誘導する機能を果たす。しかし、一方で、その分読解が単一化してしまい、それ以外の読みが疎かになってしまう傾向にあるのではないか。従来の論では、小十郎像にしても、「豪儀」で「みぢめ」で、荒物屋の主人とは対比的な人物、という語り手の強調する枠を超えられていない感が否めない。しかし、見てきたような語りの特徴を考えると、この語り手の強調して語ろうとするものばかりに着目していては、見落とされてしまうものがあるのではないかと思われる。本稿では、主として小十郎という主人公について、語り手が強く

押し進めようとする一方向の枠を一旦はずし、本文の一語一語を詳細に分析していくことによって、一面的な解釈にとどまらない読みを目指したい。

二、小十郎は何者か　―その曖昧な立場―

この物語は小十郎という男を中心に展開し、熊との関係において彼の抱く苦悩が大きな要素となっている。ではこの男は、一体何者なのか。西田良子氏[6]、続橋達雄氏[7]、三井敏郎氏[8]らは小十郎を山男だとし、田近洵一氏も、山男の系統の存在と捉えている。一方で、「伝承の《荒猟師》の狩りの姿そのもの」と述べる天沢退二郎氏のように[9]、小十郎を猟師として捉える説もある。森井弘子氏も小十郎は山男ではなく猟師だとしている[10]。また、木村功氏は、小十郎をマタギだと捉えている。一体、小十郎は山男か、猟師か、それともマタギか。

まず、柳田國男は『山の人生』において、マタギについて次のように記している[11]。

「マタギは東北人及びアイヌの語で、猟人のことであるが、奥羽の山村には別に小さな部落をなして、狩猟本位の古風な生活をしている者に此名がある。（中略）マタギは冬分は山に入って、雪の中を幾日と無く旅行し、熊を捕れば其肉を食ひ、皮と熊胆を附近の里へ持って出て、穀物に交易して又山の小屋へ還る。」

この記述と小十郎は確かに近いものがある。又、彼の持つ小刀はマタギのコヨリとよばれる刀と共通するし、彼が連れている犬もマタギイヌの存在と重なる[12]。しかし、小十郎は熊の肉を食べない。さらにマタギはシカリと呼ばれる頭目を頭に、団体で熊捕りを行いマタギ村を作っているが、小十郎には仲間の影は皆無である。これらのことを考えると、小十郎を造形するのに賢治がマタギから着想を得たことは間違いないだろうが、完全に小十郎がマタギそのものだとはいえず、小十郎＝マタギ、と簡単に済ますことはできない。

一方、小十郎と共通点が多く見られるのが、山男ら〈山中の異人〉たちの存在[13]である。

「淵沢小十郎はすがめの赭黒いごりごりしたおやじで胴は小さな臼ぐらゐはあったし掌は北島の毘沙門さんの病気をなほすための手形ぐらゐ大きく厚かった。」

この体の特徴は、賢治童話における山男たちと共通する（《表1》参照）。《表1》のように、赤い顔、巨大な身体、ばさばさの髪、黄金色の眼玉が賢治童話での山男の特徴として挙げられるが、このうち小十郎は、赤さと巨大さという二点を満たしている。またこの特徴は、伝承にみられる山男とも共通したものであるが、柳田國男は『山の人生』の中で、「是非とも知らせておきたい山人の特質」として、「顔ばかりか肌膚全体が赤かつたという噂さへ残って居る。」と、顔に限らぬ皮膚全体の赤さを指摘している。また、巨大さについても『遠野物語』三〇の「三尺ばかりの草履」、『遠野物語拾遺』一〇四の「長さ六尺もあらうかと思ふ」大

《表1》賢治童話における山男の外見

『さるのこしかけ』	「見ると、茶色のばさばさの髪と巨きな赤い顔が」
『種山ヶ原』	「山男が楢の木のうしろからまっ赤な顔を一寸出しました。」
『おきなぐさ』	「なぜあの黝んだ黄金の眼玉を地面にぢっと向けてゐるのでせう。」
『祭の晩』	「隣の頑丈さうな大きな男にひどくぶっつかりましたら、それは古い白縞の単物に、変な蓑のやうなものを着た、顔の骨ばって赤い男で、」 「その男の広い肩はみんなの中に見えなくなってしまいました。」
『紫紺染について』	「ゆっくりと空降りて来たのは黄金色目玉あかつらの西根山の山男でした。」 「それは昨日の夕方顔のまっかな蓑を着た大きな男が来て」 「それどころではなく、まんなかには、黄金色の目をした、顔のまっかな山男が、あぐらをかいて座ってゐました。そしてみんなを見ると、大きな口をあけてバァと云ひました。」
『狼森と笊森、盗人森』	
『山男の四月』	「山男は顔をまっ赤にし、大きな口をにやにやまげてよろこんで、」

きな「山男の草履」など、その足の大きさにより、体の巨大さを強調している例がみられる[14]。赤く、掌が巨大という彼の身体は山男的であり、さらに「すがめ」であることは『どんぐりと山猫』の馬車別当と共通している。小十郎の風貌は、ただの猟師や一般人とは異なる〈山中の異人〉的なものといえる。

さらに、小十郎が里人や町人から差別される存在として描かれていることも、山男たちと共通している。「里へ出ても誰も相手にしねえ。」と言い、町では店の者に「又来たかといふやうにうすわら」われる小十郎は、『祭の晩』の、自らの素性をあかそうとしない山男や、「町へはいって行くとすれば、化けないとなぐり殺される。」と考えて、木こりに化ける『山男の四月』の山男と同じ、差別される立場にある。柳田國男は『山の人生』で、マタギについて、「岩手秋田青森の諸県に於て、平地に住む農民たちが、やゝ之を異種族視して居たことは確かである。」と記してはいるが、管見の限りでは、マタギが小十郎ほどの差別を受けている記述は見出せなかった。また、柳田國男は農民とマタギとを、「名称以外には明白に二者を差別すべきものはない」というが、小十郎の立場ははっきりと里の者とは異なるものとして位置づけられており、それは次の一文に象徴されている。

「里の方のものなら麻もつくったけれども、小十郎のとこではわづか藤つるで編む入れ物の外に布にするやうなものはなんにも出来なかったのだ。」

小十郎は自分を「猟師」という。が、『ひかりの素足』の中で、

雪の中遭難し瀕死状態であった一郎が息を吹き返す場面に登場する「犬の毛皮を着た猟師」については小十郎のような身体描写はみられない上、村人である一郎の家族から差別されている感もない。さらに、小十郎が町の荒物屋で「いかの切り込みを手の甲にのせてべろりとなめ」るのも、『紫紺染について』の山男とも共通する、極めて山男的な飲食の様子である。つまり、生業はマタギ的なものでありながら、その風貌や立場は多分に山男的な男として造形されたのが、小十郎という存在だといえよう。

このように、多分に山男との共通性を持つ小十郎だが、では、彼は山男だとして済ませられるのかというと、そうとも思われない。ここで小十郎の身なりに着目しよう。

「小十郎は夏なら菩提樹の皮でこさえたけらを着てはむばきをはき」

一方、山男たちは『祭の晩』や『紫紺染について』でみられるように「蓑」を着ているのが特徴で、他には「夜具」を綿入れの代りに着るというような、異様な格好が描かれる。では小十郎のこの身なりはマタギと共通しているのだろうか。マタギの身なりを調べてみると、まず、「はむばき」は「労働、徒歩等の際、脛に着ける」もので[15]、マタギもこれを着けている[16]。賢治作品の中でも「イーハトーボのこどもたち」（詩『山の晨明に関する童話風の構想』）から「地主気取り」の男（詩『地主』）まで、幅広く用いられている。が、問題は「けら」の方である。マタギの服装は地方によっても多少異なっているようだが、ボトやコギ（共に上衣）や、マタギブンドクという綿入れの短衣、毛皮などがその代表的なものであったようだ。昭和七年に編纂された「根子部落之概要」[17]には、マタギの服装として「「ツヾレ」（論者注：布製の短衣）ニ布袴ヲ履キ毛皮編笠毛足袋」と書かれている。が、「けら」をつけているという表記は確認できない。では、「けら」とはどのような人々の身なりだったのだろうか。《表2》を見ると、賢治作品では「けら」は村人・里人といった農民の仕事着として用いられていることが分かる。「けら」は農民の象徴として機能しており、それは『十月の末』で何度も「けら」が繰り返されることからも分かる。その「けら」を小十郎が身につけているのだ。ここで触れておくと、原子朗氏の『新宮澤賢治語彙辞典』には、「けら」は「蓑」を示す東北方言で、「蓑」と「けら」に差異はないように書かれている。が、賢治は「蓑」と「けら」という用語を明らかに区別して用いているのではないか。《表2》と《表3》を併せて見ると、まずこの二つを方言と標準語という違いによって使い分け、地方色の強い作品に東北方言である「けら」を用いているわけではないことが分かる。表の通り、「けら」でも舞台が東北と特定できず、会話に方言が使われないものもあれば、「蓑」でも会話が方言であったり、東北が舞台であることはある。

原氏は、「けら」は「農民たちの雨天時の代表的な服装」というが、これは雨天時以外も農民たちの身なりとしてよく描かれる。《表2》《表3》で☆印をつけたものは、晴天時、★は雨天時、△は天候の記述がない時の記述である。ここで注目されるのは、百

《表2》賢治作品にみられる「けら」の記述

用例（太線部はそれを着ける者）	会話における方言の有無
☆『山男の四月』「けらを着た**村の人たち**」	なし
☆『狼森と笊森、盗森』「四人の、けらを着た**百姓たち**」	あり
☆『十月の末』「嘉ッコのお母さんは、大きなけらを着て」他（百姓）	あり
★『種山ヶ原』「さあ、俺のけら着ろ」（**達二の兄**の言葉）	あり
△詩『春と修羅』「けらをまとひおれを見るその**農夫**」	なし
★詩『小岩井農場』パート七「けらをきた女の子がふたり」（**畑ではたらく少女**）	なし
△詩（日脚がぼうとひろがれば）「けらを着」（**畑ではたらく少女**）	なし
★詩『凍雨』「**用足たち**も背蓑（論者注：ルビあり。ケラ）をぬらして」	なし
★詩『秋』「けらを装った**年寄りたち**」	なし
★詩（くらかけ山の雪）「けらをまとひ汗にまみれた**村人たち**や」（※雨ではなく雪）	なし

《表3》賢治作品にみられる「蓑」の記述

用例（太線部はそれを着ける者）	方言・地方性の有無
☆『祭の晩』「それは古い白縞の単物に、へんな蓑のやうなものを着た、顔の骨ばって赤い男」（**山男**）	ほぼなし
△『紫紺染めについて』「顔のまっかな蓑を着た大きな男」（**山男**）	盛岡が舞台
★『風の又三郎』「まもなく**嘉助**は小さい蓑を着て出てきました。烈しい風と雨にぐちょぬれになりながら」	あり
★『虔十公園林』「雨の日」「蓑を着て通りかゝる人が笑って云ひました」（**村人**）	あり
△『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』「口が耳まで裂けて、胸や足ははだかで、腰に厚い蓑のやうなものを巻いた**ばけもの**」	なし
△『図書館幻想』「**ダルゲ**は灰色で腰には硝子の蓑を厚くまとってゐた」	なし

姓の雨天時には「蓑」も「けら」も共に使われているが、百姓の晴天時には必ず「けら」であり、「蓑」ではないことである。が、一方で、山男やばけものたちは必ず雨天時以外に「蓑」をかぶっており、それが存在の異様さを強調している。『図書館幻想』で、「途方もなく高」い天井の部屋にいる幻想的な人物、ダルゲの着ける「硝子の蓑」という極めて空想的な世界でも、「蓑」が用いられている。この点で、賢治童話において、特に雨天以外の時には、「けら」は百姓の象徴、「蓑」は一般人とは異なる存在の象徴、というイメージの違いがあるようだ。小十郎は山男と共通性をもっていた。このことを考えると小十郎には「蓑」が用いられるはずである。しかし、ここでは「けら」となっている。しかも、これはマタギとしてどうしても必要という身なりでもないのである。

小十郎はマタギ的な生業をしているが、熊の肉を食べず、仲間を持たぬ彼は完全にマタギなのではなく、山男的な特徴を多く持つ。しかし、「けら」を着る小十郎は完全に山男でもない。小十郎の立場は山男だ、猟師だ、マタギだ、と特定できるものではなく、非常に曖昧なものなのである。従来の論のように、何者かに特定することを目指すのではなく、山男的で里人に差別される存在でありながら、わざわざ里人の象徴である「けら」を着るというこの曖昧で特異な描かれ方にこそ着目すべきである。

三、小十郎の着る「けら」の意味

では、なぜ小十郎は「けら」を着ているのか。ここで重要なのは、「里のほう」のものとは異なり、里人に差別されている小十郎が、あえてその里人たちの象徴の「けら」を身につけているということである。小十郎と山男が人々から差別されている点で共通していることは先も触れたが、さらに着目されるのがこの「けら」を身につける村人、里人、百姓が、時として山男たちを迫害するものとして登場してくることである。『祭の晩』では町に出てきた山男が村人に「いじめられて」いる姿が描かれるし、『山男の四月』では、山男は「町へはいって行くとすれば、化けないとなぐり殺される。」と思い、本来の山中の姿から木樵の姿へと身なりを変える。また同じ『山男の四月』には次のような記述が見られる。

「山男はびつくりしてふりむいて、「よろしい。」とどなりましたが、あんまりじぶんの声がたかゝつたために、円い鈎をもち、髪をわけ下駄をはいた魚屋の主人や、けらを着た村の人たちが、みんなこつちをみてゐるのに気がついて、」

ここでは、町中であまりに大きい声を出す山男を異端視して眺める村の人たちが「けら」を身につけていることが注目される。変装をしていても、どこか村人、町人とは違うものとして人目についてしまう山男であるが、しかし、彼らは山の外の世界へ出てく時、町、里、村の人々の社会の中で、極力自らの素性を隠し、迫

害を避けるため変装するのである。

これらのことから山男的な一面を持っていた小十郎が着る「けら」の意味について考えてみると、ここで小十郎が自分を「相手にし」ない里人たちの身なりである「けら」を身につけているのも、これを身につけることによって小十郎が山の外の世界、山男的な自分をいじめ、迫害する世界の中に同化しようとしていると解釈することができるのではないだろうか。山男的である自分を相手にせず差別する「里のもの」の着る「けら」を自らわざわざ纏う小十郎、その彼の着る「けら」には、彼が迫害されながらも必死に、自分を差別し虐げる世界の中へと同化しようとしている姿勢が象徴されているのではないか。

四、小十郎の持つ二面性―小十郎の抱える〈汚さ〉―

しかし、ここでもう一点考えるべき点がある。それは、山男が町での迫害を恐れて木樵に変装するのに対し、小十郎は山を歩いている時から「けら」を着ていることである。それを考えると、小十郎は『山男の四月』の山男のように、ただ町での迫害を逃れるために「けら」を着ているのではないようだ。この点で、山男が変装をするのと、小十郎の着る「けら」とには微妙な差異が生じているように思われる。

では、なぜ小十郎は着替えをせずに山の中からの普段の身なりとして里人のものである「けら」を着ているのか。このことを考える手がかりとするため、荒物屋の場面に着目してみよう。この場面について従来の論では荒物屋の主人と小十郎の対比が着目されることが主であった。まさに語り手が強調する一面に偏って作品が読まれてきたのである。しかし、小十郎と荒物屋は対比的という一面のみであろうか。小十郎の荒物屋の主人に対する態度に着目してみよう。まず目にとまるのが「叮ねいに敷板に手をついて云ふのだった。」「改めておじぎさへしたもんだ。」というように、荒物屋の主人に低姿勢な、礼儀を尽くした態度で接する小十郎の姿である。このような小十郎の態度は、彼が山男的な一面をも持っていたことを考えると非常に特異である。賢治童話中、山男たちに関してはこのような礼儀を重んじた行動が描かれることは決してない。その中で、赤く巨大で「ごりごりしたおやじ」である小十郎がこのような態度をとることは、かなり特異である。また、この低姿勢な態度以上に特異なのは、彼の食べ物を前にしたときの態度である。

・「ぢゃ、おきの、小十郎さんさ一杯あげろ。」小十郎はこのころはもうういしくてわくわくしてゐる。（中略）間もなく台所の方からお膳できたと知らせる。小十郎は半分辞退するけれども結局台所のとこへ引っぱられてってまた叮嚀な挨拶をしてゐる。」

・「小十郎はちゃんとかしこまってそこへ腰掛けていかの切り込みを手の甲にのせてべろりとなめたりうやうやしく黄いろな酒を小さな猪口についだりしてゐる。」

一方山男たちの食べ物を前にしたときの記述に着目すると、山男

は食べ物への欲求に勝てず、理性のきかないものとして描かれるのが常である。例えば、『祭の晩』の山男は、町に出てきてみかけた茶屋の団子の誘惑に勝てずに、自分が銭をもたないことをも忘れて食べてしまうのであるし、『狼森と笊森、盗森』の山男は、百姓たちの供える粟餅ほしさに、農具を隠すという悪戯を企てる。山男は食べ物を前にして理性のきかない、欲求のままに生きる野蛮な男で、しかしそれだけに素朴で正直な人物として描かれるのであり、彼等がご馳走を前にしてまず辞退するなどは決して見られない。また、飲食の様子も、山男たちについては非常に野蛮で豪快な飲食の様子ばかりが描かれる。小十郎の酒を飲む姿は、『紫紺染について』の山男が「しきりにがぶりがぶりとお酒を飲」むのと対照的である。小十郎が「けら」を着ていたことが山男たちと食い違っていたように、このような態度もまた、山男たちとはかなり食い違うものである。小十郎は山男的な側面を確かに持っていたが、しかしその小十郎は町の荒物屋の中で、山男に近い行動はとらず、かしこまった礼儀を尽くした態度をとり、店の主人たちの汚い世界の中に何とか上手く入り込もうと必死である。彼はただみじめな被害者であるだけではない。望んでそうしているのではないにしても、自ら意識的にその社会の中に入りこもうとしている一面もあるのである。

荒物屋の主人と小十郎には、対比的な関係だけではなく、類似的な関係もあるということは、小十郎と荒物屋の主人の描写に、共通する表現が用いられていることからも見て取れる。例えば、獲物を探して山の中を歩く小十郎は「まるで自分の座敷の中を歩いてゐるといふ風」だと表現される。一方、荒物屋の主人は店で「どっかり座ってゐた」と表現され、それぞれの領域での振る舞いとしてこの二者は共通している。また、小十郎と荒物屋の主人の笑いを示す表現の一致にも着目できる。

「主人はだまってしばらくけむりを吐いてから顔の少しでにかにか笑ふのをそっとかくして云ったもんだ。「いゝます。置いでお出れ。ぢゃ、平助、小十郎さんさ二円あげろぢゃ。」店の平助が大きな銀貨を四枚小十郎の前へ座って出した。小十郎はそれを押しいただくやうにしてにかにかしながら受け取った。」

賢治作品中には他にも「にたにた」「にやにや」「はあはあ」「にこにこ」等、笑いを表す多様な表現が見られるが、しかしここでの荒物屋の主人と小十郎の笑いは共に「にかにか」と表現されていることが注目される。荒物屋の主人は「にかにか」笑うのを「そっとかく」す。しかし、小十郎はその「にかにか」した笑いをダイレクトに表出させるのであり、その点でこの二者は対比的に描かれている面もある。しかし、なぜ荒物屋の笑いを「にやにや」にするなど、その笑いを描き分けなかったのだろうか。そこにはやはり小十郎と荒物屋の主人の類似関係をみることが可能なのではないだろうか。

今日は熊の皮はいらない、と小十郎を窮地に追い込むことによって、熊の皮を破格の値で買い取ることに成功した荒物屋の主人は「にかにか」笑う。花山聡氏は、これを荒物屋が「絶妙の演

技を見せ」ると述べ、体よくあしらわれる小十郎を「デクノボー」であるとしている。[18] が、小十郎は果たして「デクノボー」であろうか。なぜ小十郎は「にかにか」笑ったか、それは確かに、家族との生活のために必要な金銭を、わずかながらも手にすることができたからであろう。しかし「あんまり安いことは小十郎でも知ってゐる。」というように、小十郎は自分が「あんまり安」く買い叩かれていることに気付いている。つまり、二円を受け取っているときにも、小十郎は自分が荒物屋の主人に騙され、してやられたことを分かっているはずなのである。荒物屋の主人はあえて冷たくあしらうという〈演技〉により小十郎から安値で熊の皮を得ようとした。一方「やられる」小十郎もまた「やられ」ていることを分かりながら、「かしこま」り、荒物屋の主人に山の様子などを「申し上げ」、礼儀を尽くすという〈演技〉をすることによって、荒物屋の主人たちの世界の中で、上手くやっていこうとしているのである。それは年寄りと子供ばかりの家族のためにぜひともしなければならぬものではあったのだろう。語り手も「米はごくわづかづゝでも要ったのだ」「布にするやうなものはなんにも出来なかったのだ。」と小十郎の〈仕方なさ〉を非常に力を込めて語る。しかし、小十郎は荒物屋にうまく〈演技〉することで、自分だけ酒を飲んで帰り、そしてわずかながらの金を持ち帰るのである。主人の手口に気付きながら、演じ、彼らの世界に同調してしまっている小十郎にはもはや純朴な美徳は失われている。

木村功氏の、小十郎の「商売」が「冷徹な消費システム」に組み込まれてしまっているという指摘をはじめ、先行研究においては小十郎が商品経済という近代的な枠組みの中に構造的に取り込まれてしまっている存在であるという指摘は多々見受けられる。しかし先行研究では殆どの場合、小十郎の内面にまでは踏み込んでいない。[19] だが、小十郎は商品経済という枠組みにおいて受動的な存在としてのみ、その世界の中へと巻き込まれているのではない。小十郎の望んですることではないにせよ、その社会でうまくやっていこうと自ら働きかける姿からは、荒物屋の主人たちと同じ性質が、小十郎の中にも既に染みていることを読み取ることが可能なのではないだろうか。

根本としては確かに山男的でありながら、語り手が「いやなやつ」という荒物屋に象徴される汚い世界と共通する〈汚さ〉を自ら内包してしまっているのが小十郎の姿である。純朴な山男たちにとって、彼らをいじめる山の外の世界はわざわざ着がえなければならないほど異質であった。小十郎も山男的で、山男と同様いじめられる存在である。しかし、一方で、山の外の世界の〈汚さ〉を既に自らの中に内包している小十郎は、もはや着替えねばならぬほど純朴ではないのである。語り手の強調して語るものの みに着目するのではなく、その枠を一旦はずして詳細に本文を検討した時、そこには、語り手が「豪儀」で「みぢめ」で「立派」と強調する一面だけではない、〈汚さ〉を持つ小十郎の隠された一面をも見ることが可能となる。小十郎は二面を併せ持つ存在な

のである。

五、二面性をもつ物語――一方向的な語りの示すもの――

さらに注目されるのが、小十郎は両方の世界に通ずる二面性を持ちながらも、そのどちらにも入りきれない存在であるということである。親子熊の会話を理解し、共感するという〈山の世界〉に通ずる側面を持ちながらも、彼はその直後に「風があっちへ行くな行くなと思ひながら」「こっそりこっそり戻りはじめ」ねばならず、銃を持ち熊を捕る以上、彼と熊たちは共存できない。また一方で、荒物屋の主人と共通する側面を持ち、ひたすらにこびへつらって、彼等の世界の一部になろうと努力しても、結局小十郎は町の者から、「又来たかといふやうに」薄笑われる存在なのである。山の自然世界と町の近代的人間社会、そのどちらにも通じる一面を自らの内に包み持ちながら、その両面を有しているがゆえにどちらにも交わりきることのできない苦悩を小十郎は抱えているのである。

さて、本論では小十郎が二面性をもつ存在であることを主張してきたわけだが、それでは、このような二面性を持っていながら、語り手はなぜ「豪儀」で「立派」という一方向だけを強調して語っているのであろうか。同じ賢治童話でこのような一方向に語るという特徴は『オッベルと象』にもみられる。『オッベルと象』では語り手は「オッベルときたら大したもんだ。」と冒頭から何度も繰り返し用い、そして「けれども、そんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。」と自らの評価を述べながら語っていく。しかし、この場合、「大したもんだ」という言葉は皮肉へとしだいに移り変わっていき、そして最後には結局、象に「ひどくし過ぎた」オッベルが、象が助けを求めた手紙によってやってきた仲間の象の群れによって押しつぶされてやられてしまうというどんでん返しが待っている。この作品ではオッベルの残酷さと卑怯さがかなり明確に示されており、語り手の「大したもんだ」というオッベルに対する評価が、事実とは反転したものであることが明白に読み手に伝わるように作品が作られているのである。しかし、『なめとこ山の熊』においては、この語り手が小十郎を「豪儀」で「立派」というのは必ずしも完全に反転しているわけではない。確かにそういう一面も小十郎にはあるのであるが、実はそれだけではなく違う側面もある、ということであった。しかし、その違う側面は、本文を詳しく見ていくと見て取れるものでありながら、それを語る語り手は決してそこを強調しようとはしないのである。二側面が描かれていながら、なぜ語り手はその一方向のみを強調するのか。そこには〈汚さ〉をもちながらも、しかし、それは現実に生きる人間として多少は仕方の無いことで、それを自覚しながら悩み苦しんでいる小十郎は〈汚さ〉をもってはいてもあくまでも「立派」である、とする、作品のテーマが垣間見える。

山男的でありながらも一方で〈汚さ〉をも帯びた小十郎は、「爺さん、早ぐお出や。」という孫の〈笑い〉や、母の「笑ふか泣くかするやうな顔」に彩られながら最後の猟へと出る。小十郎が

最期の時を迎える時、生前は〈汚さ〉を帯びた「にかにか」した笑いしか浮かべることのなかった小十郎に「冴え冴え」とした〈笑った死顔〉が与えられている。〈笑った死顔〉は、『よだかの星』『雁の童子』『二十六夜』『ひかりの素足』『土神と狐』においても描かれているが、そのうち、「よだか」「楢夫」「穂吉」「雁の童子」らは完全に尊い心の持ち主として描かれている。羽虫を食べ生きているのはどの鳥も同じであるが、よだかはそこを「つらいつらい」といって「もう虫をたべないで餓えて死なう」という、他とは異なる気高い精神を持っている。「穂吉」もまた三疋の兄弟の中で一番小さいながら一人お経をじっと聞きいる「賢いお子さん」であり、脚を折られてしゃべれないほど弱っていながらも「それでもどうしても、今夜のお説教を聴聞いたしたい」というほどの「殊勝なお心掛け」の梟の子供である。「楢夫」は光の国で「黄金色のきものを着瓔珞も着けて」成仏した子供であるし、「雁の童子」にしても同じである。しかし、〈笑った死顔〉はそのようなものたちの安らかな死だけに与えられているわけではなかった。〈汚さ〉を内包しながら二面の間で苦悩して生きた小十郎や、又、同じく嫉妬や見栄という〈汚さ〉を内包し、「僕はほんたうにだめなやつだ。」とその〈汚さ〉に気付きながらもどうすることもできずに苦しみ続けた「狐」のような、〈汚さ〉を帯びながらも苦悩して懸命に生き切ったものたちにも、そこに救いとしての〈笑った死顔〉が与えられているのである。小十郎は〈汚さ〉を内包し、それをどうにもできずに悩みながら生き続けていた。そんな彼にも〈笑った死顔〉が与えられることによって、死んでから光の国に行きそこで存在し続けている『ひかりの素足』の楢夫のように、小十郎もまたどこか現世とは違う、穏やかなる場所で存在し続けているのではないかと想像されるのである。

語り手は「立派」な小十郎を強調するが、そこには密かに、「立派」とは対極にある〈汚さ〉をもが小十郎には付されていた。[20] 語り手の強調する面のみに着目するのではなく、本文の細かな記述にも目を向けた時、そこには物語のもつ新たな側面を、見出すことが可能となるのではないだろうか。

注

(1) 時おり一人称は「僕」へと変化することもある。

(2) 原子朗『鑑賞日本現代文学13　宮沢賢治』角川書店（1981年）

(3) 続橋達雄『「なめとこ山の熊」』（『解釈と鑑賞』1988年2月）

(4) 田近洵一「宮沢賢治「なめとこ山の熊」研究」（『解釈と鑑賞』1979年8月）

(5) 木村功「「なめとこ山の熊」論―賢治テクストにおける人間中心主義について―」（『宇部国文研究』1998年3月）

(6) 西田良子「「なめとこ山の熊」論―宮沢賢治の視点―」（『宮沢賢治童話の世界』1976年　すばる書房）

(7) 続橋達雄「なめとこ山の熊　賢治童話の〈解析〉なぜ〈熊〉が登場するのか」（『国文学』1982年2月号）

(8) 三井敏郎「「なめとこ山の熊」における世界観と人間の新しい孤独」（『信州短期大学研究紀要』1997年7月）

(9) 天沢退二郎「なめとこ山の熊」再考の試み―《荒猟師伝承》と賢治童話―」（『賢治研究」1999年12月）

(10) 森井弘子「宮沢賢治「なめとこ山の熊」の研究―「小十郎」は「山男」か？―」（『東大阪短期大学紀要」1995年10月）

(11) 『山の人生』の引用は『柳田國男全集3』（1997年初版第一刷発行　筑摩書房）による。

(12) 太田雄治『消えゆく山人の記録　マタギ』（1979年初版発行翠楊社）p・70「カワタチ」、p・84「マタギイヌ」

(13) 〈山中の異人〉という語は、山・森の中にいる、一般人とは異なる様子の人間を指して用いた。これには山男のほか、「かやの森」の「黄金いろの草地」にいる「おかしな形の男」である『どんぐりと山猫』の馬車別当も含むことができよう。

(14) 『遠野物語』、『遠野物語拾遺』の引用は『柳田國男全集2』（1997年　筑摩書房）による。

(15) 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』（1999年　東京書籍）

(16) 「秋田マタギ資料」（『日本民族文化資料集成　第一巻　サンカとマタギ』（1989年第一版第一刷発行　三一書房）p・306

(17) 16に同じ。p・341

(18) 花山聡「『なめとこ山の熊』考―小十郎は誰のために笑ったのか―」（「成蹊論叢」1996年12月）

(19) 管見の限りでは、千葉一幹氏の論（『賢治を探せ』（2003年講談社）のみが、小十郎の内面性にまで踏み込んでいる。千葉氏は「にかにかした笑み」と、「いかにも卑しげな素振り」での小十郎の食事とを論拠として、小十郎が「立派」どころかむしろ卑屈な人物として描かれて」おり、「荒物屋の主人」と「同じ属性を付与されている」と主張している。本稿においても、「にかにか」した笑みを小十郎の「〈汚さ〉の内包」の論拠とする点では千葉氏の論と共通するが、千葉氏がもうひとつの論拠として「いかにも卑しげな素振り」での小十郎の食事を挙げていることには疑問を感じる。山男という存在を鍵として、小十郎と荒物屋の類似をみていくことに本稿の特徴がある。

(20) 二面性を持ちながら、その間で苦しんでいた小十郎の姿は、大正八年（一九一九年）保阪嘉内あて封書に見られるような、家業を厭いながらも、「これより仕方ない」と質屋の店先に坐り、「両極端の混合体」ゆえに悩んだ、賢治自身の姿ともどこか重なっているようにも思える。

本文・引用は全て『校本　宮澤賢治全集』（筑摩書房1973年～1977年初版発行）による。漢字は、旧字は適宜新字に改め、ルビは省いた。

―本学大学院博士後期課程―